

1. なぜコスタリカなの？

今、日本では憲法を変えようとする動きが大きくなっています。国会代表の池住さんから、昨年「来年は憲法を変える動きが強まる年になる。平和憲法を持っているコスタリカはどうなっているのか実情を見てこよう」との呼びかけがありました。平和憲法を持っているコスタリカの実態はどうか、日本とどう違うのか、学ぶところがあるのではないかと、という思いから応じました。

2. コスタリカってどこ？

「軍隊のない国」というキャチフレーズから、のどかな島国なのかな、となんとなく思っていました、実はとてもでもない大変な危険地域にあるのだとわかりました。「コスタリカの奇跡」という映画をご覧になった方がおられるかもしれませんが、その監督に言わせると、世界で最も危険な地域の一つの中米にあるのだと知りました。



南北のアメリカがつながっている細い帯状のところで、コスタリカのすぐ上（北）はニカラグア、ホンジュラス、グアテマラなど、いわゆる紛争地帯、下の方はパナマ、こういうところですよ。決して国境争いが無い、あるいは内戦が無いという場所ではありません。そういう位置にあつて、非武装中立を貫いているということにまず驚きました。

3. コスタリカ共和国

では、どんな国かと言いますと、人口500万人弱。隣国ニカラグアなどからの移民・難民が最近増えていて、その数約100万人、人口の2割ぐらいにもなっているのではないかとされています。コスタリカは、入ってくるのは拒まない、教育と医療は保障するという政策をとっています。

「コスタリカは民主、自由、独立、多民族、多文化の共和国である」と、憲法で決めています。面積は九州と四国を合わせたほどの広さ、言葉はスペイン語です。

4. 首都サンホセ

サンホセは標高1000～1200mのところにあります。人口は165万人。周りにもいくつか都市があるので、国民の大半は中高地帯に住んでいて、大変過ごしやすい。私たちは、猛暑の日本から行きましたので、避暑地に行ったみたいで、とても快適でした。四季がないので、1年中夏の軽井沢のような気候です。

「教育ってみんなを平等にする力があるのかもしれないね」というなかなか味のあるナレーションが、NHKの「世界ふれあい街歩き・サンホセ」という番組でありました。もう一つのキーワード「軍隊がない」「軍隊をなくして教育」という言葉も出てきます。BS衛星放送を中心に何回も再放送されています。機会があれば、ぜひごらんください。

5. プラ・ヴィーダ（挨拶ことば）

直訳すれば「純粋な人生」とか「素朴な生活」という意味になりますが、コスタリカ人は好んでこの挨拶言葉を交わすそうです。この挨拶言葉がコスタリカを理解する核心になるのではないかと思います。この心というか精神というか、気持ちというか、ここのと

ころに触れたのが今回の旅の一番の収穫だったと感じて帰ってきました。

6. 軍隊廃止、非武装中立

1949年にコスタリカの憲法が新しくなりました。日本の憲法より2年後になります。常備軍としての軍隊を廃止する、と第12条で決めました。それ以来軍隊はなく、兵器がなく、戦車もありませんと説明を受けました。

1983年には積極的永世非武装中立宣言を出しました。なぜ出したか。中米では国境争いが絶えない、コスタリカでない他の中米でいろいろ紛争が絶えない。あるいはロシア・当時のソ連とアメリカの覇権争いみたいなことや、あるいはその傀儡（かいらい）政権みたいな国ができたりもしました。コスタリカにも軍事基地を置くとアメリカから圧力がかかりました。コスタリカは憲法で軍隊を持たないと決めているから軍事基地を置くわけにはいかない、アメリカとの関係を断つわけにもいかないというので、「積極的永世非武装中立宣言」を時の大統領が出して、基地を造りませんでした。他国間で紛争が起きても、どちらか一方に味方するというかもしれないという方針を貫いている、ということです。

なお、積極的にというのがついているのは、ただ中立だから私たちは手出ししませんというのではなく、積極的に平和のために動くという意味が込められています。記憶に新しいところでは、核兵器禁止条約が去年国連で採択されました。それをコスタリカは何回も何回も提案したり、各国を回って、いろいろ説得工作をしてきたりした成果だそうです。そのように積極的に平和のために努力するという意味が込められた積極的永世非武装中立宣言です。

本を読んだり、資料をあさったりして、「事前学習」をしたのですが、本当に軍隊はないのか再軍備の動きはないのか、というもやもやした疑問がぬぐえませんでした。この辺を確かめるのが、今回の「旅」の私のテーマだと思い定めて、コスタリカでは、会う人ごとにこの質問をぶつけてみました。

7. 国会

国会はどんなところか、まず現地のビデオ映像を見てください。実におおらかに、国会の議場に入れてくれました。席はコの字型になっていて、議員どうしお互いに顔が見えます。議席のところはどうぞ座ってくださいと、国会の報道官に勧められ、説明を聞きました。ガラスで仕切られた向こう側に記者席、もう一方の側に傍聴席があって、プラカードなどを持ってきて良いと、聞きました。文字通り「ガラス張り」なのだと感じました。

国会は1院制で、定数は57人、選挙区が7つあって政党名で投票する完全比例制になっています。任期は4年、連続しての再選は禁止です。今、議員を務めている人は次の選挙に出られない、大統領も連続して出られない、つまり権力が集中することを避けている、これを大真面目にやっているのだからびっくりしました。

「世襲議員は誰かいますか」という質問に、現在57人の議員がいますが、そのうち1人だけですという答えが返ってきました。57人の内訳は、男が32人、女性が25人。男女ができるだけ半々になるように各政党の候補者名簿は男女交互にして提出しなければならない、という決まりがあるのだそうです。

「いわゆる再軍備ですね、軍隊をもっていないことに疑問を持つ議員とか、そういうことが議題や話題になったことは無いのですか?」、とあえて質問したら、「それは一度もありません、またそういう動きもありません」と、国会の報道官は明確に答えました。

8. オスカル・アリアス元大統領（1987年ノーベル平和賞受賞）

中米に平和をもたらしたということでノーベル平和賞を授賞したアリアス元大統領が自宅に招いてくれました。アリアスさんは、この賞をもとにアリアス財団をつくり、今なお世界を飛び回り、平和のために尽くしています。

中米5カ国の大統領に、武力紛争を続けてはいけなと説得、交渉をした場面で、部屋にカギをかけて、ここで合意に達しなければカギを開けないと説得した体験など興味深い話をしてくれました。

アリアスさんは軍隊廃止・軍隊放棄に対して、こんなふうに言っております。「軍隊放棄を決めたことは、賢明な措置だった。その満足度は年を経るとともに大きくなって、現在のコスタリカ人で再軍備を考える人は一人たりともいないと思う」と。



9. オットン・ソリス前国会議員（現BCE中米経済統合銀行コスタリカ代表）



この春まで国会議員をしていた方です。現在は中米経済統合銀行のコスタリカ代表をしています。経済にたいへん明るい方で、明解に現在の状況を分析している方だなと感じ入りました。

また、2015年に、長年にわたって平和憲法を保ってきた日本とコスタリカの両国民にノーベル平和賞を、という提案をしたお一人でもあります。提案の理由として、軍隊の力なしに経済大国になった日本と、ラテンアメリカでめざましく発展した経済小国のコスタリカと一緒に平和賞の候補になれば、他の国にも適用できるという重要なメッセージを世界に発信できるのではないかと思ったといいます。コスタリカ国会でこれを決議して国会の名でノーベル賞委員会に提案しました。国会では右も左もなく、全会一致で決議したそうです。この辺が日本の事情と全然違うところかなと思いました。

私たち一行のひとりが、日本の場合、尖閣列島とか竹島とかの難題があるが、コスタリカにはそういう問題がないのかとソリスさんに尋ねると「2012年に隣国ニカラグアがコスタリカのある島を占拠した。コスタリカは軍事力でなく、ハーグの国際司法裁判所に訴えた結果、コスタリカの主張が認められ、それに国際世論もあって解決した。法律と世論ですね。軍事力ではなくて交渉あるいは対話で国際紛争を解決すべきではないか。つまり、紛争解決にはそれぞれの国のイデオロギーと国境、さらにそれぞれの国の方針は、たとえ気に入らなくても尊重しなければならない」とソリスさんは言いました。確固たる信念を持つての返答だと思いました。

アメリカ経済は戦争を必要としている、そういう産業構造になってしまっている、だから絶えずどこかで戦争を起こさなければやっていけない国になってしまっている。コスタリカも日本も平和でなければ経済的にも伸びていかない。戦争を起こしたり、戦争に加担しなくてもいいのではないかと、ソリスさんは付け加えました。

ソリスさんに重ねて質問しました。「そうはいってもニカラグアが領土を侵してきたりするような現状もあるので、憲法を変えて一定の軍事力を持つべきだ、という再軍備あるいは憲法改正というような動きはありませんか？」と。「いやあ、そんなことを言い出す政治家がいたら、次の選挙では2票しか入らない」というのがソリスさんの答えでした。

10. ロベルト・サモラ弁護士

2003年にコスタリカがイラク戦争の有志連合に参加したと米国が発表したのを、まだ学生だったサモラさんが聞いて、コスタリカの最高裁判所に訴え、憲法違反であるとの判決を勝ち取った方です。当時はサモラさんのほかにも大統領とか外務大臣とかを相手に、憲法違反訴訟を起こした人が何人もいたそうです。フリーライター、足立力也さんの著書から引用しますと、メディアはこぞって反対、政府寄りの機関、新聞でさえも、なんと恥知らずな大統領だという見出しを掲げて批判したそうです。大規模なデモが繰り広げられ、各世論調査でも9割以上が大統領に反対したという状況だったそうです。



同じ本の中で「この大統領はコスタリカ人としてのアイデンティティーを失った」という題をつけ、「平和を求めることこそコスタリカ人のアイデンティティーであり、いかなる形であれ戦争や侵略に加担することはコスタリカ人としてはあってはならない」と主張する新聞投書があった、多分これが「9割反対」の心であり、国民性とか国民の心だったのだろうと足立さんは書いております。もう一つびっくりしたのは学生が違憲訴訟を起こす、しかも自分で訴状を書くということが行われたということです。聞いてみるとコスタリカの最高裁判所は憲法に対して特別な部門を設けているのです。

11. 最高裁判所第4法廷・憲法法廷＝憲法裁判所

最高裁判所第4法廷は俗に憲法法廷、また憲法裁判所ともいわれています。憲法を扱う窓口は24時間開いている、どんな紙でもFAXでもメールでも受け付けるのではないかとサモラさん言っていました。

驚いたのは、小学生でも違憲訴訟を起こしていることです、例えば異臭を放つ事業所が近くに建って勉強ができない、勉強する権利が奪われたとして訴え、違憲訴訟で勝っています。また、ある学校の校長先生が校庭に車を停めているのに対して、遊び場を奪われたと小学生が訴え、違憲の判決が出た例もあります。コスタリカには大きな運動場がないので、もったもだと思うのです。車1台ぐらいと日本では思うかもしれませんが、1台分でも毎日停められたら、遊ぶ権利が奪われたというわけです。コスタリカの小学校では子どもの権利を徹底的に教え、1人ひとり「遊ぶ権利」「守られる権利」そして「学ぶ権利」があることを教えており、だから訴訟行動も出てくる。同時にそれをちゃんと受け止める最高裁判所第4法廷・憲法法廷があるのだということのようです。

実際1年間で2万件ほどの訴えがあります。その40%ぐらいは憲法に関係のない個人的な訴えなので、受理されませんが、残りの60%は受け付けられています。受け付けた内の20%ぐらいが、憲法違反だという判決が下りていて是正の措置が取られる、ということです。すから、まさに憲法が暮らしの中に生きているのです。

12. 選挙最高裁判所・民主主義形成研究所（第4の権力）

「選挙最高裁判所」の話に移ります。ここでは、選挙に関することすべてを管轄しています。選挙前6ヶ月間は警察の権限も持ち、選挙行政に関わることについては、警察もその指示に従うことになります。その意味で司法、立法、行政の「3権」に匹敵する「第4の権力」とも言われています。

併設して、「民主主義形成研究所」というのがあります。選挙権がちゃんと行使できるよ

うにいろいろ研究しているところです。文字が小さくて読めない人に拡大レンズを用意するなど、障害のある人でも投票できるよう工夫したり、選挙の意義や仕組みなどを学ぶ教材を開発したり、ワークショップを開いたりしています。

13. 「兵士よりたくさんの教師を」

「兵士よりたくさんの教師を」とか、「兵舎（軍参謀本部）を博物館に」というスローガンどおり、教育に力を注いでいます。2017年の国家予算の28・7%が教育費で、これは省庁内ではトップの割り振りです。教育費は、国内総生産（GDP）の8%以下になってはならないと憲法で定めているとのことです。（最近の中日新聞に「日本の公教育費割合がまた最低」2.9%、OECD加盟国で最低という記事がありました。）

14. レプリカ・デ・ハイチ小学校



実際、学校はどんなふうになっているのか見ようというので、市内のハイチ小学校を見学しました。この学校は児童数1300人くらいで、校舎は立派なものではありませんが、中庭はなかなかカラフル。子供たちも元気いっぱい、とても明るい雰囲気です。教室は、こぢんまりとして30人学級ということでした。

印象的だったのが、児童会や生徒会の役員選挙です。国政選挙と同じように、まず政党づくりから始める。つまりこういうことをしますといった公約を掲げて人を集め、みんなに呼びかける。小学校にはたいてい幼稚園が併設されていて、園児のうちから実施する。そんなことをしても小さい子には理解できないのではないかという質問に、リング党とかバナナ党とか名付けて楽しく、親しませることから始めるのだそうで、「自分で考えて、自分で選び決める」ということを、きちんと体験することが大切だということです。

15. 教育

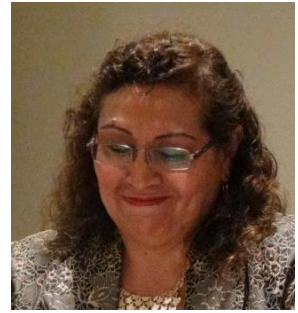
今年から就学前教育つまり幼稚園2年が加わって計11年が義務教育です。ただ小学校6年を終わってから中高一貫教育5年の制度もあるので、この5年を義務教育であると説明する人もいて、義務教育は13年という人もいます。いずれにせよ、日本より長い義務教育期間があるようです。

小・中の義務教育の期間においても、「落第生は結構いる」そうです。総合点で、100点満点で60点以上ないと進級させない。その代わり落第しても力がつくまで面倒をみるということのようです。卒業出来ないまま就職する生徒もあり、日本でいえば夜間中学といったような制度もあるそうです。

NHKの解説委員をしていた小出五郎さんが、かつてコスタリカへ行き、授業参観した時の感想を本に書いておられます。「中学校の授業で生徒の討論の活発なことに驚いた。討論の準備をし、意見を述べ、意見を聴く。それがコスタリカという国の教育を貫く柱になっていることがよく分かった。そこにあるのは、人間を大切にするという精神である。人間が大切にされてこそその平和である。私は平和教育が実にしっかり根付いていると思った」と。

16. コンスエロ・バルガス教諭

平和教育プログラムの作成リーダーの一人です。先生は、平和教育は①自分との平和（1人ひとりがかけがいのない人間であること、つまり1つ1つ自分の生活設計を立てられる、自分で考えて独り暮らしができる）②他人との平和（これが民主主義の基礎である。人々のつながりの中で生きてゆく）③自然との平和（環境哲学といってもよい。コスタリカは生物多様性の宝庫といわれているところで、元々多様性に対しては敏感である。自然環境と共存してゆく）の3つを挙げておられます。この3つにすべて含まれているようですが、平和教育という柱や教科があるわけではなく、平和教育の考え方を各教科ごとに、その教科に合うように採り入れていくとのことでした。



17. ジャーナリスト協会

ジャーナリスト協会に属していないと、コスタリカではジャーナリスト活動はできない。まずそういう説明がありました。「意見交換会」は、協会の4人の役員が壇上に並び、私たちがあらかじめ伝えておいた10項目ほどの質問に答えるという形で進展。答えは1項目3分くらいでということでしたが、物すごく熱心な役員さんたちで、持ち時間を大幅に延長してしまいました。

その中で注目すべき回答が何点かありました。まず「市民の情報源は何ですか？」とい



う質問に「1位がテレビ、2位がネット、3位が新聞」の順。この順番は日本と変わりません。ネットの利用がどんどん増えている点も同じようです。

「政府や広告のスポンサーが報道やジャーナリ

ストの発言に手を加えたり、規制したりすることはないか？」には「政府にも広告主にも、そんなことはない。ただ、報道する側に自己規制があるかもしれない」という答えが返ってきました。この場合、自己規制というのは、日本でいう「忖度する」ということではなくて、メディアに対する反論権、あるいはアクセス権がコスタリカでは確立している。つまり、記事なり放送なりで間違ったり、違う意見が表明されたりしたとき、マスメディアに対して意見発表の場を提供することを求める権利であり、訂正や反論の機会をメディアは与えねばならないということです。それも新聞なら、同じ紙面の同じ位置に掲載する。放送なら同じ番組で同じ時間だけ、2分だったら2分与えられます。そういうことがあるので、表現とか事実に対して慎重に検討して報道することになる、そういう意味での自己規制があるのかもしれないというような言い方をしていました。

それから、報道の自由に対する規制の動きがあるのかなのかという質問に対しての答えです。

ある政府の時、報道の自由を規制する法律を作ろうとしているという情報が政府筋から伝わってきましたが、協会が報道規制反対のキャンペーンを張り、国民からもこぞって「報道の自由・言論の自由を守ろう」という声が沸き起こり、いま現在、規制を強化するような法律はできていないということです。

ちなみに、世界の報道の自由度ランキングを「国境なき記者団」が発表していますが、昨年と一昨年は、コスタリカは世界第6位、日本は72位。今年はコスタリカが10位、日本は67位で、ずいぶん差がありますね。

日本ではメディアが二分化されて、憲法を変えようというメディアも出てきていますが、コスタリカでもそういう動きはないのかという質問に対しては

憲法を変えて再軍備しようというというのは、コスタリカ国民のテーマになりえません。公にそういったことを討論しようという状況ではありませんと断言されました。

ただ最近ネットを通じて、フェイクニュースがアメリカからどんどん入ってくるのが恐ろしい、実際に見たことはないのですが「軍隊バンザイ」とかいうフェイクニュースが流れてきてもおかしくない状況にはあると思います、フェイクニュースは民主主義を危機に陥らせる可能性があり、意識して解決していくテーマだと思っているとジャーナリスト協会の人は言っていました。

また「(新聞を) 読まない若者」が増えていますが、おしゃべりとか対話や討論は盛んにやっています。「話す、聞く文化は健全です」と言っていました。「会話、対話、議論など話し言葉のやり取りが、思考を深め、創造力を豊かにする」と常日頃、学生たちに呼びかけていた私にとって「わが意を得たり」とうれしくなりました。

18. 環境

コスタリカでは自らを「緑の国」というように、国立公園・自然保護区が国土の4分の1もあり、森林面積は2014年の調査で52・4%も占めています。豊かな自然環境と観光の共生とか自然環境と人間社会の融合をめざす「エコツーリズム」の発祥の地ともいわれています。電力はほぼ100%、再生可能エネルギーでまかなっており、内訳は水力78%、風力10%、地熱10%などとなっています。

19. モンテベルデ自然保護区

コスタリカの真ん中に位置する標高1500mのモンテベルデ自然保護区へ行きました。しゃれた小屋みたいな建物が随所にあって、散策の前に、自然や生物多様性について一定のレクチャーを受けました。自然を理解し、保護するための大切な仕組みだと思いました。

国からの補助は35%ほどありますが、私営なので基本的には入場料と全世界からのカンパで成り立っており、日本からも随分寄付があるという話でした。保護区では葉っぱそっくりの昆虫や高い木の上のナマケモ、原始林の巨木などに感動しました。



20. 「心地よい旅」「プラ・ヴィーダ」

素朴な暮らし、純粋な人生を意味する「プラ・ヴィーダ」という挨拶言葉そのものの生き方をしているコスタリカ人に接して、心打たれるものがありました。人権とか民主主義とか平和とか言った言葉を銜（てら）いもなく、気取りもなく、コスタリカの人たちは当たり前のように話してくれました。考えてみますと、これはすべて日本国憲法で謳（うた）っていることですから、私たちも日本国憲法を日々の暮らしの中で、あたりまえに生かしていくことが大切なのだと痛感しました。

先に話した小出五郎さんは「コスタリカは非武装中立、環境保全、教育重視を基本政策とし、建前と本音を使い分けることなく、政策実現のため熱心に発言し行動している国である」と著書の中で述べています。

「そう、そう。そうですよね」小出さんのおっしゃる通り、憲法をそのまま、建前ではなく本音で実施しているコスタリカの人たちの心と息吹に触れ、「心地よい旅だったなあ」という感じを持って帰ってきました。報告は以上です（拍手）。

このあと質疑応答となったが、まず「コスタリカのような考え方を日本で実現するには、どのような運動をすればいいか。ある世論調査で日本人の 94% が自衛隊は必要だと答えている。私は、軍隊がない方がいいと思っているが、どこかの国が日本を攻めてきた時にどう対応するか、やはり心配である。軍隊をなくした場合、それに代わる何らかの解決の仕組みができればいいが…」といった質問があった。

高野さんは「武器を持たないことが一番の防衛になる、というのがコスタリカ人の基本的な考え方で、国際世論と国際裁判所、交渉と対話を徹底的に追求することが軍事に優るということです。日本でも、自衛隊の評価をめぐるてはいろいろありますが、今は交渉と対話への道を探る努力が必要ではないだろうか」などと答えた。

続いてコスタリカ経済についての質問に対しては「ラテンアメリカの中では優等生だが、服装や住宅などは、日本と比べると裕福そうではない。経済的には、ちょとまじだ、そしてもうちょとましになりたいというのがコスタリカ人の気分だという人がいた。コーヒー、バナナ、パイナップルなど農業中心だったのが、最近は電子部品や通信機器など IT 産業が入ってきて工業国的色彩に変わりつつという説明も聞いた。今後どんなことに投資してほしいか、と聞くと、豊富な自然資源を生かした産業・例えばエコツーリズム、日本は技術や教育に優れているので、その面での投資・援助に期待したいという。工場誘致などという発想ではなく自然、技術、教育という発想に、緩やかにもうちょと豊かにという発想と相通じるものを感じた」と高野さんは述べた。

さらに中米にはびこっている麻薬問題などに関する質問があった。

「麻薬の生産地は南米、消費地はアメリカ合衆国。コスタリカはその通り道になっているので、その対策に当たる当局の悩みは大きいようだ。路上で寝ている人もよく見かけた。取り締まりは麻薬を使っている人が中心で、もっと厳しく取り締まらねばならないという自覚はあるようだが、売買する人にまでなかなか手が回らないのが実情という話も聞いた。教育も就学率が高いが、お金が潤沢にあるわけではないので校舎などは貧弱だ。しかし教員の数は本当に多く、きめ細かい教育が行われているようだ。一人ひとりが掛け替えのない人間だということを徹底して教えるコスタリカの学校教育に比べると、日本の教育の内容はどうなのだろうか」と高野さんは語り、2 時間にわたる特別報告は終了した。